

「十二使徒の名」

ルカの福音書 6:12~16

はじめに

人の持っているもの、正確には人に与えられるもので、生まれてから死ぬまで、いや死んでも変わらないもの、それが名前です。人の外見や性格、能力などは絶えず変化しますが、この名前だけは変わりません。たとえ死んでもそれは変わりません。人の名前は、その人自身やその生き様すべてを指すものとして残り続けます。人の名前とはそれほど重要なものなのです。今日の箇所はイエシュアの選ばれた十二人の使徒たちについてですが、彼らの人となりについてではなく、彼らのその名について考えてみたいと思います。なぜなら彼らはみなその容姿や性格、能力や行いの故に選ばれたわけではないからです。誰でも良かったわけではありません。彼らはみな名指しで選ばれ、その名で呼ばれ、イエシュアに召し出されたのです。ではそこにどのような意味があるのでしょうか。見てまいりましょう。

1. 使徒

ルカの福音書【新改訳 2017】

6:12 そのころ、イエスは祈るために山に行き、神に祈りながら夜を明かされた。

6:13 そして、夜が明けると弟子たちを呼び寄せ、その中から十二人を選び、彼らに使徒という名をお与えになった。

イエシュアは祈るためにひとつの山に登られました。そこで御父である神と夜を徹して語り明かされました。その内容はイエシュアの使徒となるべき十二人の者たちの選び、選抜、聖別に関することであったことがわかります。このような出来事がかつてイスラエルの中でも起こりました。それはモーセの時代、彼をとおしてイスラエルがエジプトの奴隷状態から解放された後のことです。

出エジプト記【新改訳 2017】

19:1 エジプトの地を出たイスラエルの子らは、第三の新月の日にシナイの荒野に入った。

19:2 彼らはレフィディムを旅立って、シナイの荒野に入り、その荒野で宿営した。イスラエルはそこで、山を前に宿営した。

19:3 モーセが神のみもとに上って行くと、【主】が山から彼を呼んで言われた。「あなたは、こうヤコブの家と言い、イスラエルの子らに告げよ。

19:4 『あなたがたは、わたしがエジプトにしたこと、また、あなたがたを鷲の翼に乗せて、わたしのものと連れて来たことを見た。

19:5 今、もしあなたがたが確かにわたしの声に聞き従い、わたしの契約を守るなら、あなたがたはあらゆる民族の中であって、わたしの宝となる。全世界はわたしのものであるから。

19:6 あなたがたは、わたしにとって祭司の王国、聖なる国民となる。』これが、イスラエルの子らにあなたが語るべきことばである。」

19:7 モーセは行って、**民の長老たち**を呼び寄せ、【主】が命じられたこれらのことばをすべて、彼らの前に示した。

19:8 民はみな口をそろえて答えた。「私たちは【主】の言われたことをすべて行います。」それでモーセは民のことばを携えて【主】のもとに帰った。

これはシナイ山において神がモーセに十戒をはじめとする律法を教えられるその直前の出来事です。まずモーセ一人が神に呼ばれ、シナイ山に上り、そこで神は彼に語られ、その後に「**民の長老たち**」すなわちイスラエル十二部族の長たちがモーセのもとに呼び寄せられています。この様子が今日の箇所イエシュアと十二人の使徒たちの姿と見事に重なります。モーセはこの後、イスラエルの民に十戒をはじめとする律法を教えています。一方イエシュアはこの後、山上の説教と呼ばれる教を説いていけます。この二つの描写の類似、結びつきが指し示すもの、それはまずイエシュアがモーセのような、いやそれ以上の預言者、真の預言者でありイスラエルの民を教え導く御方であることが示されており、そして選ばれた十二人の使徒たちはその「**民の長老たち**」となる存在であることが示されているのです。それは以下のようにして成就します。

マタイの福音書【新改訳 2017】

19:27 そのとき、ペテロはイエスに言った。「ご覧ください。私たちはすべてを捨てて、あなたに従って来ました。それで、私たちは何をいただけるでしょうか。」

19:28 そこでイエスは彼らに言われた。「まことに、あなたがたに言います。人の子がその栄光の座に着くとき、その新しい世界で、わたしに従って来たあなたがたも十二の座に着いて、イスラエルの十二の部族を治めます。」

このように、選ばれた十二人の使徒たちとはイエシュア、そしてイスラエルの民と同様に、象徴的な存在でも、その時限りの存在でもなく、イエシュアが「その栄光の座に着くとき、その新しい世界」、すなわち「神の国」において「十二の座に着いて、イスラエルの十二の部族を治め」る者として名指して選ばれた者たちだということです。それを証拠に次の節ではその彼らひとり一人の名前がはっきりと記されています。それは彼らの存在が旧約聖書にその名を記された者たち、アブラハム、イサク、イスラエルの父祖たち、モーセのような預言者たち、ダビデのような王たちなどと同様に、神のご計画においての具体的な存在、人材であることを表しています。ですから間違ってもこの十二使徒の中に自分を当てはめたり、どこかの牧師の名を当てはめたりしないようにしてください。神の選びとは抽象的、象徴的なものではなく常に具体的なものであることを覚えてください。ただイエシュアはこの上記の御言葉に続けてこうも語っておられますのでご安心ください。

19:29 また、わたしの名のために、家、兄弟、姉妹、父、母、子ども、畑を捨てた者はみな、その百倍を受け、また永遠のいのちを受け継ぎます。

イエシュアは十二人をお選びになり、彼らを「使徒」とお呼びになりましたが、これをヘブル語でシェリーヒーム(שלִּיחִים)と言い、「遣わす、手を伸ばす」という意味のシャーラハ(שָׁלַח)がその語源です。

この言葉は本来、永遠のいのちの木に「手を伸ばす」という意味で使われました（創世記 3:22）。つまりこの「使徒」シェリーヒームには「いのちの木からとって食べ、永遠に生きる」者という意味があるので。まさに上記にあるとおりです。

ちなみに旧約聖書にあるアブラハムの七代前の系図に、このシャーラハと同じ綴りでシェラフ(שלף)という人物がいるのですが、彼はエベル(אֵבֶל)を生んだ（創世記 11:14）とあります。このエベルはイスラエル人の別名、ヘブル(人)と同じ綴りの名です。つまりシェラフの次がエベルであり、エベルの前にシェラフがいるという系図です。これもまたただの系図ではなく、神のご計画を表しているものであり、それはつまりシャーラハ、使徒とはヘブル人、イスラエルの民の先に立つ者である、ということが表されているのです。それはまさに使徒たちがイスラエルの十二部族の長となることを約束されたイエシュアの御言葉と結びつくものです。このように、神のご計画、「神の国」においてこの「使徒」という存在が、イスラエルの民の後に現れ、旧約の時代ではなく新約の時代に選ばれた存在でありながらも、やがてはそのイスラエルに先立つ存在、族長となる存在であることを覚えましょう。

2. 十二の言葉

ルカの福音書【新改訳 2017】

6:14 すなわち、ペテロという名を与えられたシモンとその兄弟アンデレ、そしてヤコブ、ヨハネ、ピリポ、バルトロマイ、

6:15 マタイ、トマス、アルパヨの子ヤコブ、熱心党员と呼ばれていたシモン、

6:16 ヤコブの子ユダ、イスカリオテのユダで、このユダが裏切る者となった。

十二人の使徒たちが象徴的、比喩的、抽象的な存在ではなく、具体的な一個人を指すものとしてここに彼らの名が明記されています。シモン、ヤコブ、ユダについては同名の者がいるためその違いが分かるように親の名や出身地などが付け加えられています。しかし聖書において名前には常に意味があり、重要なメッセージが込められています。では使徒たちの名前について考えてみましょう。

① ペテロと呼ばれたシモン

「ペテロ」とは「岩」という意味のギリシャ語ですからヘブル語が使われたイエシュアが同じくユダヤ人である彼を「ペテロ」と呼んだとは考えにくいです。ヨハネはイエシュアが彼をヘブル語で「ケファ(כֵּיפָא)」と呼んだとはっきり記しています（ヨハネの福音書 1:42）。このケファが意味する「岩」はただの岩ではなく本来は「岩穴」であり、それは「住みか、家」を意味しています（ヨブ記 30:6）。しかしそれは決して上等で立派な住まいではなく、追い立てられた者、虐げられた者が逃げ隠れる家というような意味で、ここに神のイスラエルに対するご計画が表されているのです。彼らはやがて現れる不法の子、獣と呼ばれる反キリストによって彼らの家であるエルサレムを追われ、ボツラ「囲い」という意味の岩だらけの地に逃げ込むことが預言されているからです

ミカ書【新改訳 2017】

2:10 さあ、立ち去れ。ここは憩いの場所ではない。ここは汚れで滅ぼされるからだ。それはひどい滅びだ。

2:12 ヤコブよ。わたしは、あなたを必ずみな集め、イスラエルの残りの者を必ず呼び集める。わたしは彼らを、囲い (ボツラ) の中の羊のように、牧場の中の群れのように、一つに集める。こうして、人々のざわめきが起る。

この「囲い」と訳されているボツラという地は、ギリシャ語名ではペトラと呼ばれています。反キリストの手を逃れたイスラエルの残りの者たちはこのペトラに逃げ、そこに彼らを救い出す者として深紅の衣を身にまとい再臨のイエシュアが来られるのです。

イザヤ書【新改訳 2017】

63:1 「エドムから来るこの方はだれだろう。ボツラから深紅の衣を着て来る方は。その装いには威光があり、大いなる力をもって進んで来る。」「わたしは正義をもって語り、救いをもたらす大いなる者。」

63:4 復讐の日がわたしの心のうちにあり、わたしの贖いの年が来たからだ。

63:6 わたしは怒って諸国の民を踏みつけ、わたしの憤りをもって彼らを酔わせ、彼らの血の滴りを地に流れさせた。」

63:7 私は【主】の恵みを語り告げる。【主】の奇しいみわざの数々を。【主】が与えてくださったすべてのことを。そのあわれみと豊かな恵みにしたがって与えてくださった、イスラエルの家への豊かな恵みを。

このようにペテロすなわちケファ、「岩」という彼の名には神のご計画のクライマックスの一場面が表されているのです。そして彼の本名である「シモン」についてですが、「聞く」という意味のシャーマ(שמעון)がその語源であり、本来はただ聞くことを指すのではなく「神が人を捜して歩き回られる音、またはその呼ぶ声を『聞く』(創世記 3:8)」という意味の言葉なのです。やがて神であるイエシュアがご自分の民を捜し求めて地上再臨され、ケファ「岩穴」に逃げ込んだイスラエルの残りの者たちのもとに来られること、そのような神のご計画がこの名には秘められているのです。

② アンデレ(אנדריא)

「誓う」という意味のナードル(נדד)という言葉が彼の名に見つけることができます。この言葉は本来、アブラハムの子イサクの子ヤコブ、すなわちイスラエルの誓った一つの誓いを指しています。

創世記【新改訳 2017】

28:18 翌朝早く、ヤコブは自分が枕にした石を取り、それを立てて石の柱とし、柱の頭に油を注いだ。

28:19 そしてその場所の名をベテルと呼んだ。その町の名は、もともとはルズであった。

28:20 ヤコブは誓願を立てた。「神が私とともにおられて、私が行くこの旅路を守り、食べるパンと着る衣を下さり、

28:21 無事に父の家に帰らせてくださるなら、【主】は私の神となり、

28:22 石の柱として立てたこの石は神の家となります。

この時のヤコブの状況は決して良いものではありませんでした。自分の兄から憎まれ、いのちを狙われ、家を追われて逃げる途上にあつたのです。しかし彼はいつの日か自分の家に帰ること、神とともに帰ること

と、そして神とともにその家に住まうことを宣言、預言して誓ったのです。その成就是もちろん地上再臨されるイエシュアと、イエシュアによって反キリストから救い出され、イエシュアとともにエルサレムに帰るイスラエルの残りの者たちによって果たされます。つまりこのアンデレという名に秘められた神のご計画もケファ、ペテロと呼ばれたシモンと同様のものであるということです。

③ ヤコブとヨハネ

ヤコブとはもはや言わずと知れたイスラエルを直接的に指し示す名ですが、その弟ヨハネの名の由来である「恵む、あわれむ」という意味のハーナン(יְהִי)の本来の意味と結び付けるならば、ここにも同様の神のご計画を見ることができます。

創世記【新改訳 2017】

33:1 ヤコブが目を上げて見ると、見よ、エサウがやって来た。

33:4 エサウは迎えに走って来て、彼を抱きしめ、首に抱きついて口づけし、二人は泣いた。

33:5 エサウは目を上げ、女たちや子どもたちを見て、「この人たちは、あなたの何なのか」と尋ねた。ヤコブは、「神があなた様のしもべに恵んでくださった子どもたちです」と答えた。

これはヤコブすなわちイスラエルが妻と子どもたちを連れて故郷に帰って来た時の場面です。ここで「神が…恵んでくださった」という箇所には聖書で最初のハーナンが使われています。ヤコブは兄のエサウに迎えられ、抱きしめられ、その家族ともどもに故郷の地に喜び迎え入れられたのです。しかしここに至るまでヤコブの心は恐怖で押しつぶされそうでした。兄のエサウに殺されるかもしれないと思っていたからです。しかしそのような死の恐怖はここで終わったのです。すべての敵意、すべての罪は消え去り、和解し「二人は泣いた」のです。しかしこの事実は「型」です。やがて地上に再臨されるイエシュアと、この御方をメシアとして受け入れるイスラエルの民との間に起こる和解をこの出来事は指し示しているのです。そのような神のご計画を秘めた名がこのヤコブとヨハネなのです。

④ ピリポとバルトロマイ

ピリポとはギリシャ語で「馬を愛する人」という意味だそうです。またバルトロマイとは「トロマイの子」という意味でこのトロマイ(旧約聖書ではタルマイ)という人は聖書に複数いますが、いずれも異邦人です。異邦人の名を持ったこの二人の存在には、まさに二通りの解釈をすることができます。一つは私たち異邦人もイエシュアを信じるなら、イスラエルと同様に神の御前に選ばれた者とされるという希望です。そしてもう一つは、異邦人の地に追い散らされたイスラエルの民を、イエシュアはまさに名指しで呼び出され、集められ、ご自分の民とする、という神のご計画を指し示すものです。どちらも真実であり、どちらも必ず起こる神のご計画です。この二人の名にはそのような意味が込められているのです。

⑤ マタイとトマス

マタイ(מַתִּי)は、彼の名は「贈り物」という意味のマッターン(מַתָּן)がその由来です。この言葉が本来示している贈り物とはいわゆる結納品、つまり結婚のために花婿の家から花嫁の家に贈られる特別な贈り物を指しています。そしてそれは異邦人の家がイスラエルの家に結ばれる形での結婚を意味しています。

創世記【新改訳 2017】

34:11 シェケムは彼女の父や兄弟たちに言った。「皆さんのご好意を得られるのなら、おっしゃる物を何でも差し上げます。

34:12 どんなに高い花嫁料や贈り物であっても、私にお求めください。おっしゃるとおりに差し上げます。ですから、どうか、あの人を私の妻に下さい。」

これはヒビ人のシェケムという人がヤコブすなわちイスラエルの娘ディナに求婚した時のものです。シェケムはイスラエルの家の好意を得るためにどんな代償もいとわず、自分はもちろんその家の男たち全員にイスラエル人の証しである割礼を受けさせることまでしたのです。つまりシェケムとその家はイスラエルの民になることを望んだ異邦人であり、私たち異邦人の教会の「型」です。このようにマタイという名にはイスラエルに結び付けられる教会の存在が表されているのです。

創世記【新改訳 2017】

20:2 アブラハムは、自分の妻サラのことを「これは私の妹です」と言ったので、ゲラルの王アビメレクは、人を遣わしてサラを召し入れた。

20:3 その夜、神が夢の中でアビメレクのところに来て、こう仰せられた。「見よ。あなたは、自分が召し入れた女のために死ぬことになる。あの女は夫のある身だ。」

20:4 アビメレクは、まだ彼女に近づいていなかった。そこで彼は言った。「主よ、あなたは正しい国民さえも殺されるのですか。」

20:5 彼が私に『これは私の妹です』と言ったのではありませんか。彼女自身も『これは私の兄です』と言いました。私は、全き心と汚れのない手で、このことをしたのです。」

20:6 神は夢の中で彼に仰せられた。「そのとおりだ。あなたが全き心でこのことをしたのを、わたし自身もよく知っている。それでわたしも、あなたがわたしの前に罪ある者とならないようにした。だからわたしは、あなたが彼女に触れることを許さなかったのだ。」

この出来事もまた結婚に関する出来事です。ゲラルのアビメレクがアブラハムの妻サラと結婚しようとしたというものです。彼は神の御前に「全き心と汚れのない手で、このことをした」と言っており、ここにトマスの名の由来であるトーム(τομ)の最初の言及があります。もちろんこの結婚はなりませんでした。アビメレクはアブラハムとその神を畏れ敬い、彼と平和の契約を結ぶ結果となりました(創世記 21:32)。このように、マタイとトマスの名にはいずれもイスラエルと異邦人の教会が結び合わされて同じ「神の国」の民となる神のご計画が表されているのです。

⑥ アルパヨの子ヤコブと熱心党员シモン

先ほども述べたように再臨のイエシュアを指し示す名であるシモンと、イスラエルを直接的に指し示す名であるヤコブがここにもあり、神のご計画におけるこの両者の存在の大きさが彼らの名には表されているのです。

⑦ ヤコブの子ユダとイスカリオテのユダ

そして「主をほめたたえる」という意味のヤーダー(יהודה)を由来とする名、それがユダです。

創世記【新改訳 2017】

29:35 彼女はさらに身ごもって男の子を産み、「今度は、私は【主】をほめたたえます」と言った。それゆえ、彼女はその子をユダと名づけた。その後、彼女は子を産まなくなった。

ヤコブの妻レアはこのようにしてユダという名を用いました。男の子が生まれた、与えられたことによる主への賛美、それがヤーダーです。そして「その後、彼女は子を産まなくなった」とあります。神のひとり子、御子であるイエシュアが生まれること、人の形として来られること、それですべてが終わり、完成します。しかしそれは二度行われます。十字架にかかれ、よみがえられるための初臨、そして王の王、主の主として来られる再臨、この二度のイエシュアの現れ、来臨の事実が二人の使徒ユダという名には表されているのです。私たちは今日も主を賛美していますが、見える形でイエシュアを目の前にささげる賛美こそ真の賛美礼拝です。再臨のイエシュアの御前で、レアが言ったように「今こそ私は主をほめたたえよう！」と、私たちは声を上げるのです。人でも物でも出来事でもない、ただ主イエシュアだけがほめたたえられる世界、それが「神の国」です。イスラエルと教会、やがてこの両者の賛美は御国で、イエシュアの御前で一つにされます。それを表すかのように、使徒ユダの名はやがて一人だけになります。裏切りでさえ、聖書に記されたすべては、神のご計画を表しているのです。